



—東地中海地域ニュース—

イスラエル：アイアン・ドーム（短距離ロケット防衛システム）の初期運用能力遅延
（8日付エルサレム・ポスト紙）

1. 7日、IDF（イスラエル国防軍）関係筋によると、当初今年11月にIOC（初期運用能力）確立が発表される予定であったアイアン・ドームについて、イスラエル中部の空軍基地に待機させ、ガザ地区またはレバノン南部からのロケット攻撃が激化した場合にのみ展開させるという決定をIDFが下した。
2. 7日、複数のIDF高官は、IOCが2011年第1四半期まで遅延する見込みであることを明らかにし、その原因が技術的要因ではなく、複雑な同システムを使いこなすための錯綜した訓練手段によるものであると強調した。
3. IDFは既に、ガザ地区境界およびレバノン国境沿いに複数の同システム展開場所を特定しているが、国防関係筋によれば、アイアン・ドーム・システムを展開させるため多数の展開場所を全国に備えるというアイデアは、基本的にリアルタイムでプラグに差し込み、発射態勢をとって、稼働させるためのものである。

中東調査会注；「アイアン・ドーム（鋼鉄の屋根）」計画は、イスラエル軍が、ヒズブッラーやハマースのミサイル攻撃に対応するために開発した迎撃システム。2006年の第二次レバノン戦争では、イスラエル軍にはヒズブッラーのミサイルを迎撃する兵器がなく、北部住民が混乱に陥った。イスラエル軍は、2010年1月にシステム構築を終了したと発表していた。米国は、当初、同システムに冷淡だったが、2010年5月、2億500万ドルの支援を決定した。実際の効果以上に、ヒズブッラーのミサイルに対抗手段を構築したことで、国民の心理的不安はかなり解消すると見られる。同システムの問題は、対費用効果。ガザのハマースの手製ロケット弾は低性能で安価だが、迎撃ミサイルは高価なため、すべてのロケット弾を迎撃するのは財政的に無理があるようだ。都市部や重要施設を守るために使用される公算が高い。